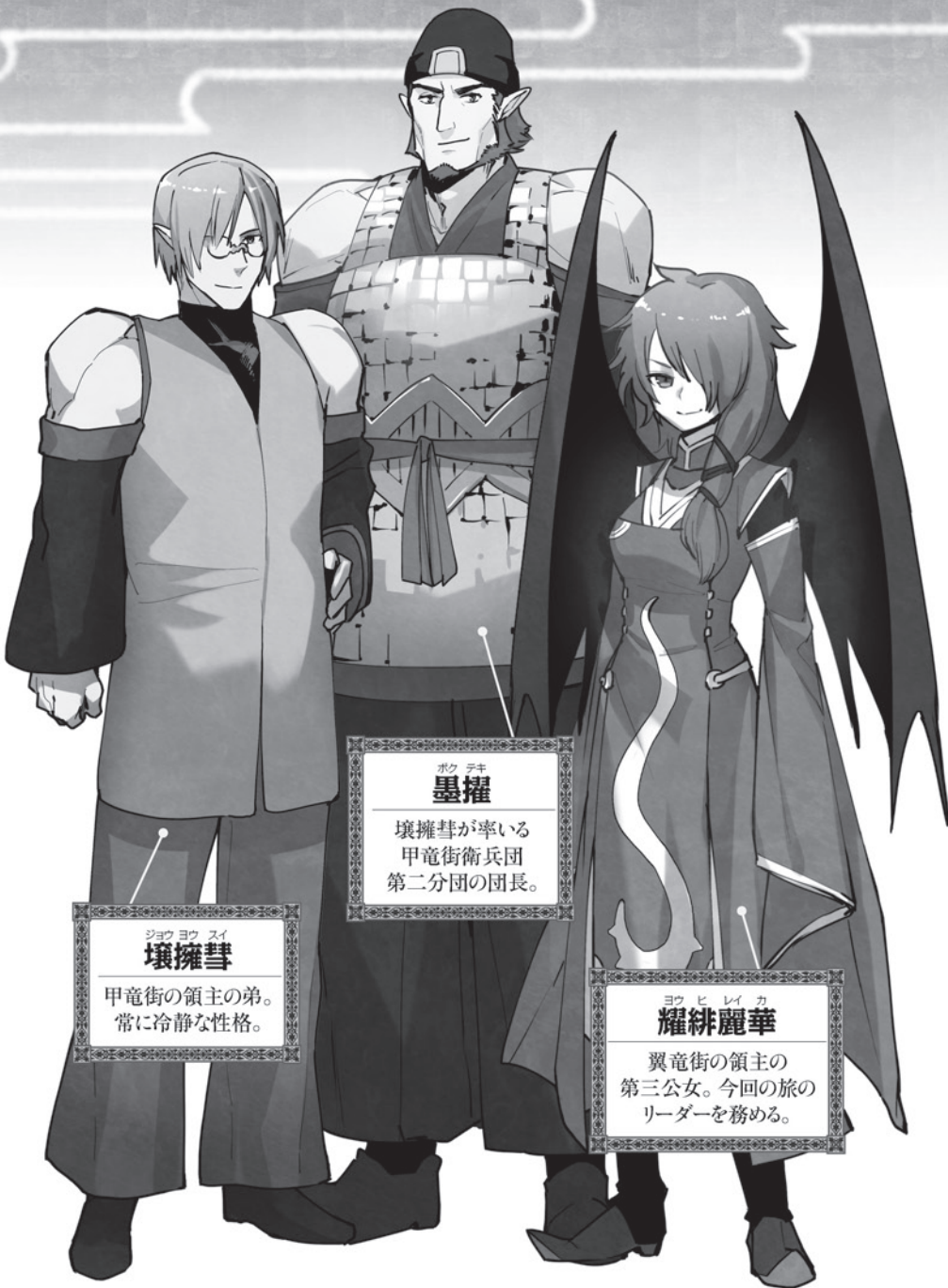


鍛冶師ですが何か！

九

フェイオンフウ

驍廣とともに
行動している賢虎。



ボク デキ
墨權

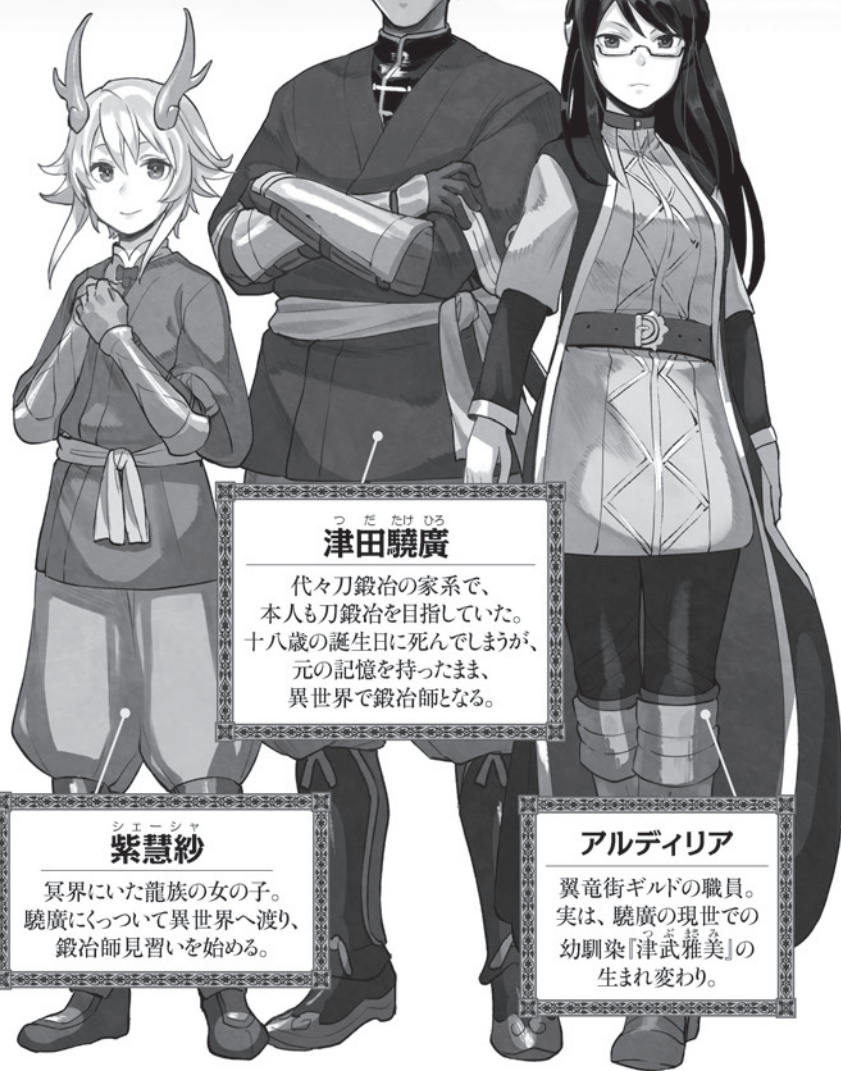
壤擁慧が率いる
甲竜街衛兵団
第二分団の団長。

ジョウ ヨウ スイ
壤擁慧

甲竜街の領主の弟。
常に冷静な性格。

ヨウ ヒ レイ カ
耀緋麗華

翼竜街の領主の
第三公女。今回の旅の
リーダーを務める。



つ だ たけ ひろ
津田驍廣

代々刀鍛冶の家系で、
本人も刀鍛冶を目指していた。
十八歳の誕生日に死んでしまうが、
元の記憶を持ったまま、
異世界で鍛冶師となる。

シエーシツ
紫慧紗

冥界にいた龍族の女の子。
驍廣にくっついて異世界へ渡り、
鍛冶師見習いを始める。

アルディリア

翼竜街ギルドの職員。
実は、驍廣の現世での
幼馴染「津武雅美」の
生まれ変わり。

目次

プロローグ	妖精探索	7
-------	------	---

第一章	甲竜街 ^{ニースヘッグ} で厄介事が起きそうですが何か！	25
-----	---------------------------------------	----

第二章	戦 ^{いくさ} を前にして鍛冶しますが何か！	138
-----	---------------------------------	-----

プロローグ 妖精探索

蟲^{むし}たちが新しい命を育^{はぐ}むための声を響かせ、日中は捕食者から身を隠していた小動物が、糧^{かて}を得ようと動き出す夜の森——その中を、音もなく駆け抜ける一つの影。

影の動きを感じ取って、逢瀬^{おうせ}の声を止める蟲や草木の陰へ逃れようとする小動物はいない。この事実が、影の主が卓越した稔形^{ねんぎよう}の業^{わざ}を駆使していることを証明していた。

もし仮に、ここに影の主の姿を認識できる者がいたら、驚嘆^{きょうたん}の声を上げていただろう。

そんな影が不意に動きを止め、周囲の気配を探るように、頭の上に存在する三角耳をピクピクと動かした次の瞬間、近くの灌木^{かんぼく}の中に飛び込み、身を隠した。両の腰に吊るされている武器に手を伸ばした様子から、ただごとではない事態がこの人物に降りかかっているようだが……

「くっ！ まさか先回りされていたなんて……。この先に待ち構えている者が三人、それから私を追っている者が、一、二……五人ほどか。このまま強硬突破を図ったとしてもそう易々とは……。それに、天樹国にまさかあんな『化物』がいたなんて……。万事休す、かな……」

私——ヴェティス・ソーニャは、自嘲するように薄笑いを浮かべました。漏れてくる『気』から

すると、前方に潜む者は私よりも格上のようにです。

私はつい先程まで、配下の者を捨て石にして豊樹の郷から逃げ出したヴァルトエルフ氏族の族長カイブを追って、天樹国の中心地である輝樹の郷へ潜入していました――

本来、天樹国の輪状山脈の内側に入るには、出入りを監視するスプリガン氏族の結界を突破しなければいけません。ですが今回は、国に戻るカイブのためになのか、結界がなくなっていました。あっさり天樹国へ潜入した私は、そのままカイブを追跡し、彼を裏から動かす今回の事件の黒幕を確認するため、輝樹の郷に辿り着いたのです。……そこで、私はとてもないものを目撃してしまいました。

郷に入ると、郷の仕方で戦支度を整えた戦士らしき様々な妖精族たちが、殺気と憤怒を孕んだ氣勢を上げているという異様な光景が目に見え込んできました。

そんな鬼気迫る輝樹の郷の中を、カイブはまるで身を隠すように体を小さく丸めながら、ハイエルフ氏族の邸宅の奥へと進んでいきます。

私は、輝樹の郷の全域に広がり、ハイエルフ氏族が住居として利用している天樹の板根（本来地下に伸びる根が地上に露出し、上部が平板状に肥大した根のこと）の陰に隠れ、遠眼鏡を取り出すと、カイブが向かった天樹の幹の洞とその周辺を観察することにしました。

しばらくの間、周囲の喧噪を耳にしつつ観察していると、カイブが入った洞のやや上方の樹幹にある手すり付きの露台に、一人の美しい女性が姿を現しました。

そのあまりに整った容姿に、私は思わず見落してしまいましたが、すぐに彼女の背後にカイブが傳えていることに気付きます。

「そうですね。犬神の呪法は、穢呪の病までは起こしたものの、『発動』させられませんでしたか……残念です。成功していれば、甲竜街侵攻への大きな一助となったものを。仕方ありませんね、ご苦労さまでしたカイブ。甲竜街への侵攻はセンチリオ様のお力にて成就されることでしょう。既にヴァルトエルフ氏族の郷からも戦士たちが到着し、あなたの息子さんが陣頭指揮にあたっております。翼竜街で受けた傷もまだ癒えぬというのに、これまでよくやってくれました。ここからは息子さんに後を任せ、郷に帰ってゆっくりと傷を癒しなさい」

可憐な花びらを連想させる女性の美しい唇から紡ぎ出された言葉は、美しい容姿とはかけ離れた、私の心を凍えさせる凍風のごとき声色でした。

彼女から言葉を掛けられた当のカイブも、傳いたまま表情を凍りつかせ、顔には大量の汗を流し、何度も生唾を呑み込むと、震えながら言葉を発しました。

「ラ、ラクリア様……分かりました。それでは後のことは我が息子に託しましょう。今後我らヴァルトエルフ氏族は、ラクリア様とセンチリオ様に絶対の忠誠をお誓い申し上げます。それではこれにて失礼をさせていただきます……」

彼は、深々と頭を下げてから立ち上がり、顔を伏せたまま後ろ歩きで露台の反対側にある扉へと移動して、後ろ手で扉の取っ手に触れます。ハイエルフ氏族の女性――ラクリアには決して背中や尻を向けることがないように配慮したのでしょう。そんな彼が再度深々とお辞儀をして、一步扉の

外に足を出したときでした。

「——ああ、そうでした。少しお待ちなさい、そなたにこれを授けます。呑んでからお行きなさい」
そう言うてラクリアが懷から取り出したのは、豊樹の郷でカイブの配下が魔獣『邪妖精』へと変貌する前に呑んだ黒い丸薬によく似た白い丸薬でした。

白い丸薬をカイブは震える手で受け取り、焦燥感漂う表情でラクリアを見上げると、彼女は凍てつく氷の微笑を浮かべていました。

「これはハイエルフ氏族に伝わる霊薬です。そなたの傷を癒す一助となるでしょう。今まで天樹国のためとはいえ、そなたたちヴァルトエルフ氏族に辛い仕事を押しつけてしまったことお詫びいたします。ですが、そなたたちの尊い犠牲のおかげで、憎き甲竜街の者たちへ、怒りの鉄槌を下すことができます。カイブ、ハイエルフ氏族の族后として感謝申し上げます」

そう告げ、彼女はカイブの前まで歩み寄り、丸薬を持つカイブの手を包み込むように自らの手を重ねて一筋の涙をこぼしながら、頭まで下げてみせたのです。

その姿に驚いたカイブは、慌てて跪き、

「ラクリア様！ あなた様から『感謝』のお言葉をいただき、望外の喜び。ですが、我らヴァルトエルフ氏族は天樹国の一員たる妖精族として当たり前のことをしたまでにございます。お役に立てたのならば光栄の至り！」

と、声を上げると、丸薬を掲げて床に頭をこすりつけます。

そんなカイブを見たラクリアが一瞬だけ、浮かべた笑みは、得体の知れない禍々しいモノに見え

ました。思わず悲鳴を上げそうになったほです。

恭しく丸薬を両の手に押し戴きながらカイブが退出し、部屋にはラクリア一人が残りました。

先程の二人の会話から、カイブの後ろにいた黒幕は、ラクリアと呼ばれるこの得体のしれない女性に間違いないと判断し、そのまましはらく彼女の観察を続けることにしました。すると——

『色欲』、どうやら上手くはいかなかったようだ。だから俺に任せればいいと言ったのだ、少しは俺を頼ってくれればいいものを……で、どうするつもりだ？ このことが知れると、この前失敗をしでかした『怠惰』がお前の失敗を声高に申し立てるぞ。そうなれば『傲慢』のお前への評価が下がることだろう。それでいいのか？」

突然、地の底から這い出た亡者のような声が聞こえてきた次の瞬間、ラクリアの足元に伸びる影が盛り上がり、徐々に人の形へと変わっていったのです。そんな驚愕の現象が目の前で起こっているというのに、ラクリアは特に驚いた様子もなく、あろうことか笑みさえ浮かべ、

「それは困るわあ。『怠惰』の坊やがなにを騒ごうと大したことではないけれど、『傲慢』様からの評価が下がるのは面白くないわね。『嫉妬』、力を貸してくれるかしら？」

と、影に向かって平然と返したのです。

そして、これまでは笑顔を作っても開かなかった口を横に大きく開け、嗜虐的な表情で笑いはじめると、清楚で輝くような美しい容姿が陽炎のごとく揺らめきました。しかも、数回瞬きをすると見る見る肥え太り、首、腰、腹といった部位を分かつくびれが消失し、イボガエルのような体躯の醜女になってしまったのです。

それを遠眼鏡で凝視してしまった私は、再び漏れ出そうになった悲鳴を必死に呑み込みました。

『『色欲』の頼みとあればなんなりと請け負うが、俺になにを希望みな？』

「そうねえ……今出ていった、あの役立たずの郷の者たち全てを、あの役立たずの目の前でゆつくりと縊り殺し、あの役立たずが失敗した『犬神の呪法』を代わりに行うのはどうかしら？　そうすれば、今までの失態の憂さも晴らせるし、『傲慢』様の評価を落とすこともなくなるのではなくて」

このときの私は、驚愕の事態に遭遇し、状況判断能力が著しく低下していたのだと思います。なぜなら、二人の会話に聴き入ってしまっていたのですから。すると――

「ほく、それはなかなか良い考えだ。では早速あの者の郷へ向かうとしよう。と、言いたいところだが……どうやらネズミが一匹うろついているようだな」

『嫉妬』と呼ばれた影人が、私の隠れている方へ顔を向けると、ニタリと笑います。

その目は確実に私を捉え、遠眼鏡越しではありますが一瞬、影人と視線が合った気がしました。いえ、確実に合ったのだと思います。それでようやく自らの危機に気付いた私は、急いで遠眼鏡を懐に入れ、隠れていた板根の陰から脱兎のごとく飛び出し、一目散に駆け出しました。

「っ！　なにを落ち着いて眺めているのよ、もう！　誰かいませんか！　曲者が輝樹の郷に潜入しています！　ただちに捕えてください!!」

イボガエルのような醜女の姿から一瞬にして元の美しいハイエルフ氏族の姿に転じたラクリアが、かな切り声を上げました。

私は雑多な妖精族の間を掻い潜って逃げ出したのですが、そんな私の動きは影人の興味を引いて

しまったようで、こんな声が聞こえてきました――

「ほほう……。これはなかなか面白そうなことになった。俺は少し遊んでくるとしよう。それでは先程の話は遊びから帰ってからということで。では後ほど『色欲』♪」

その後、私は群衆を隠れ蓑にして郷を脱し、天樹国から脱出すべく一路輪状山脈山頂に向かったものの、山頂にある結界に引っかかり、スプリガン氏族に発見されてしまいました。

どうやら、カイブと私が通過した後に、すぐに結界は張り直されたようですが、不覚にも私はスプリガン氏族の追手がかったたことでようやくそれに気付くという失態を犯してしまったのです。もちろん、発見されたとはいえ、そう易々と捕まる私ではありません！

冒険者として数々の修羅場を潜ってきた経験を元に、時には山間の木々や岩石の陰に潜んでは追手の目をやり過ぎ、たとえ襲撃を受けても、ジャマダハルを駆使して襲撃者を退けます。

そのように、どうにかスプリガン氏族が追跡を諦めるようにと頑張ったのですが……彼らは輪状山脈の裾野に広がる森に達してもまだ追ってきました。

追跡の手が緩まないことに焦りながらも、私は驕横さんたちに今回知ったことと、天樹国の不穏な動きを知らせるために、彼らが向かう甲竜街へ駆け続けたのです。

――ですが、そんな私の思惑を知ってか知らずか、あと少しで天竜賜国の勢力圏に入ろうとしたとき、前方で待ち伏せをする三つの影に気が付き、灌木へと身を隠したのです。

背後からはヒタヒタと追い迫るスプリガン氏族。

前方には、私よりも格上とおぼしき三つの影が、私に来るのを今か今かと待ち構えています。

まさに『前門の虎、後門の狼』といった状況に陥ってしまったのです。

「……私もここまでなのかな？ もう少し生きたかったけど、冥界にはリデルさんや死んでいった『森の陽光』の仲間もいることだし、そんなに寂しいこともないよね……」

そう苦笑気味に愚痴っていると、両腰に吊るしたジャマダハルから精獣の草原山猫が姿を現し、私を少し怒ったように睨みつけました。

「ヴェティス様、なにを弱気なことを言っておられるのですか！ 私の主ともあろう者がそのようなことを口にするとは、まだまだ修行が足りませんね。そんなことでは冥界におられるリデル様が嘆かれますよ。もう少ししっかりなさってください!!」

鞘から抜いていないにもかかわらず姿を現した草原山猫の獵彪に、私は目を白黒させてしまします。

「なに、獵彪!? いきなり姿を現したと思ったら説教？ こんな危機的状況だつていうのに、あなたはいつも尻を叩くのね。……でも、確かに弱気が過ぎたかな。リデルさんとも『文殊界が今以上に穏やかで良い世界になるように頑張る。そして、私自身も幸せになる!』って約束したんだつたその約束を守るためにも、こんなところで死んでなんかいられないか。抵抗して、抵抗して、絶対に活路を切り開いてやる!! 行くよ、獵彪!! オン・イダティタ・モコティタ・ソワカ!!」

私は、鞘からジャマダハルを抜き放ち、驍廣さんから「いざと言うときには唱えろ」と教えられ

ていた韋駄天真言を獣気を放出しながら唱えました。

すると、獵彪がブルブルツと体を震わせるのに合わせて韋駄天の力が私の体を覆い、脚力など、高速で動くことを可能にする身体能力の強化がなされたのです。

身の内に漲る力を自覚し、『これならば……』と一筋の光明を見出した私は、隠れていた灌木の隙間から、待ち構えている三人のスプリガン氏族に対して強襲を仕掛けました。

——当初、この目論見は成功しました。

ジャマダハルに刻まれた梵字から韋駄天の力を引き出した私は、速力にものを言わせて彼らを文字通り鎧袖一触。相手に剣を抜く暇も与えず四肢を斬りつけて行動不能にし（さすがに命を奪うことは躊躇いました）、そのまま後続の追手を振り切つてしまおうと森の中を駆け抜けたのです。

しかし、神将たる韋駄天の力を用いた後にどのようなことが起きるのかを、私は失念していました。当然ですが、神将の力が永続的に使えるわけはなく、森の中を駆けていると、ほどなくして韋駄天の力は私の体から急速に消失していったのです。

しかも、代わりに強烈な倦怠感と痛みが私を襲いました。そのときになつてようやく、私は麗華様が教えてくれた、命宿る武具に宿る力を使った後に起きる代償を思い出しました。

麗華様は「強力な『力』を発揮することはできたが、体から大量の『気』が奪われたことで倦怠感に襲われ、身動きが取れなくなった」と語っていましたが、それを実感することになったのです。そして今回、このことが最悪の結果を招くことになりました。

引き離れた追手が、諦めることなく私を追跡し続けていて、私が倦怠感と痛みに苛まれている間



に、追いつかれてしまったのです。

待ち伏せをしていたスプリガン氏族に比べて力量は劣るものの、一度捕捉した獲物は決して諦めない姿勢には脱帽します。ですが、その獲物が私自身であることに焦りを禁じ得ませんでした。

満足に動けない体で逃走を図ったとしても、苦もなく追いつかれてしまうことは火を見るよりも明らか。仕方なく私は、木々の陰に隠れることでのうとしました。

しかし、この試みは失敗に終わりました。なぜなら、追手の中にスプリガン氏族だけでなく、遠眼鏡越しに見た、あの影人までいたからです。

追手がスプリガン氏族だけならば、私は逃げられたでしょう。実際、スプリガン氏族たちは灌木や樹木の洞などに隠れた私を発見できずに何度も通り過ぎていきましたから。ですがその度に、影人が「なにをしている、愚か者が！」と叱責の言葉を飛ばし、通りすぎたスプリガン氏族を呼び戻したのです。

だから私は、都度痛む体を無理やり動かして、別の場所に移って身を隠したものの……そんなことがいつまでも通じるわけもなく、ついに発見されてしまいました。

私を発見したスプリガン氏族は慎重でした。そのまま襲いかかってきてくれれば、私は彼の口を封じること、逃走を続けられたかもしれません。でも、彼は私を発見するなり、指笛を鳴らし、仲間を呼んだのです。

仲間が即座に反応し、私の隠れている灌木を取り囲みました。

万全の状態でも五人のスプリガン氏族を相手にするなんて、一か八かの賭けだというのに、倦怠

感と痛みに苛まれる今の私ではどう考えても逃げるのは不可能だと、頭では分かっていました。それでも、私は諦められませんでした。リデルさんとの約束があったから……

たとえ満身創痍になろうとも、この場から逃げ延びる！

私が覚悟を決めてジャマダハルを構えたとき、またも影人の声が周囲に響いたのです。

「ほほう。まだ諦めぬか……面白い♪ 実に面白いぞ、猫娘！ 天樹国に来てからというもの、退屈な日々とうんざりしていたが、貴様のような良質な獲物に出会えるとはな。褒美として俺のペットにしてやろう。スプリガン氏族の者どもよ！ その猫娘の命を奪うことは許さん。ただし、命さえ保てれば、四肢を斬り飛ばそうと構わぬ。生きたまま捕えるのだ!!」

スプリガン氏族は命令に従い、ゆつくりと囲みを狭めてきました。

このとき私は、影人の発した言葉で、彼とラクリアの正体に気が付きました。

私のような獣人族を『ペット』にするなんて、いくら妖精至上主義が蔓延している天樹国であってもありえません。ただ、好んで口にする者たちがいます。——『人間』です。

人間の中には、昔から容姿の異なる私たち獣人族や竜人族、妖獣人族や妖人族を『人』として認めず、蔑み、欲望の捌け口にする者がいました。

近年ではアンスポロス帝國などで、そのような考えを改めようとする風潮が生まれつつあると聞きます。しかし、魔術を使うことのできる人間を生きたし生けるものの頂点にあると考えている聖職者の国の者は、いまだに人間以外の人族を蔑んでいます。

影人は間違いなく聖国の者です。ラクリアもまた、天樹国を内部から蝕む刺客でしょう。が、そ

れが分かったところで事態は好転するわけありません。スプリガン氏族がジリジリと囲みを小さくしてくる中、私は覚悟を決め、隠れていた灌木から躍り出ると、彼らと対峙したのです。

そんな私が面白いのか、姿は見えないのですが、影人が私を嘲笑します。

「くつくつく♪ 小鹿のようにブルブルと震えながらも刃向おうとするとは、実に健気。そうではなくては『色欲』からの頼まれごとを後回しにしてまで、このような獣臭い森の中に足を運んだ甲斐がないというもの。最後まで抗い、俺を楽しませてみせろ！」

この言葉を聞き、私の中から恐怖や焦りは消え失せました。代わりに、強い怒りが湧き、『絶対に声の主の思う通りになってたまるか!』という気持ちが生まりました。だから私は、ジャマダハルをより強く握ります。

スプリガン氏族は、私の気迫に押されたように一瞬体を硬直させました。ですが私を観察しながら、先程よりも慎重に五人全員で囲みを狭めます。その動きには、人数が多いからという驕りなど一切ありません。そんな絶体絶命の中——

「死力を尽くして戦う者を嘲笑し、しかも『楽しませろ』とはなんたる醜悪！ 許せん!!」

森の奥から、怒りの声が響き、続いて矢が飛んできて、私の背中側にいたスプリガン氏族の足を射貫きました。

それを合図に、森の奥から人影が躍り出て、私を囲んでいたスプリガン氏族と戦いはじめました。「そおら！ 周囲の警戒が疎かすぎるぜえ!!」

二振りの細剣で襲いかかったのは、兎人族のラルゴ・スフォルツくんでした。

「天樹国のスプリガン氏族か……ここは既に天竜賜国の領域に入っている。他国の領域で一人に五人がかりとは恥を知れ！」

翼竜人族の張洪さんも姿を現し、槍を振るいます。そして、先程スプリガン氏族の足を正確に射貫いたダークエルフ氏族のモニカ・ビンスクさんを引き連れて、大きな鉞を肩に担いだ妖熊人族の土門蔵人さんがやってきました。

翼竜街のギルドで何度も顔を合わせたことのある面々の出現に私は安堵し、力の入らなくなりつつあった膝から崩れ落ちそうになりました。しかし、今ここでそのような醜態を晒しては『森の陽光』の仲間たちに笑われてしまうと、震える足を叱咤し、なんとか踏みとどまりました。

「ええ!? 誰かと思ったらヴェティスだったのかよ！」

なんとか体裁を保っている私を見たラルゴくんが、スプリガン氏族と剣を斬り結びながら声を上げます。そこで土門さんたちも、ようやくスプリガン氏族と争っていたのが私だと気が付いたようで、驚きで目を見開いていました。ですがすぐに私からスプリガン氏族を引き離そうと、各々一人ずつ彼らと戦いはじめ——私の前にいるのは、足に矢を受けて満足に動けない者だけになりました。当のスプリガン氏族は、それでも私に殺意のこもった目を向け、短剣を片手に、足を引き摺りつつも、ジリジリと迫ってきます。

いくら務めとはいえ、足に矢を受けてもなお、私を害そうとするなんて、何が彼をそこまで駆り立てているのか……

魔獣騒動の際、私は満身創痍になりながら魔獣『不死ノ王』の出現を知らせに翼竜街へ向かいま

した。そのときの私と同じく、目の前にいるスプリガン氏族にもこの役目を果たさなければならぬ理由があるのでしょいか？

そんなことを考えている間に、スプリガン氏族と私は一足一刀の間合いに入ろうとしていた。が、このときまたしてもあの声が——

「とんだ乱入者に興醒めだ。もういい……退けえ！」

スプリガン氏族は当惑の表情を浮かべたものの、すぐに戦いをやめて天樹国のある輪状山脈へと去っていきました。

足に矢を受けた者も、仲間の後を追おうとしたのですが、射貫かれた足では速く動くことはできず——

「がっあ!!」

彼の影から短剣を持った腕が伸びると、彼の背後から心臓を一突きにしたのです。その光景に、私も土門さんたちも驚きのあまり動きを止めてしまいました。

すると、それを狙っていたかのように、スプリガン氏族を刺したのと同じような腕が、私たちの影から伸びてきます。

もちろん、土門さんたちは不意を突かれたとはいえ、既に一度目にしている攻撃だったため、難なく躲しました。でも、情けないことに私は体力と気力の限界に達していて、身を振って急所を避けるので精一杯でした。

「うっ……」

脇腹を貫かれた痛み思わず漏れ出る声。

「疲弊した体で、心臓への一撃をよく避けたと褒めておこう。もともと、ここで心臓を貫かれておれば、長い苦しみの果てに息絶えることもなかったであろうがな」

そう言い残すと、生き残ったスプリガン氏族とともに影人の気配も完全に消えました。

ですが、私は彼らの動向に意識を向ける余裕はありません。なぜなら、影人が残した言葉の意味を身をもって味わっていたためです。

短剣が刺さった脇腹からは少くない出血があり、しかも本来ならば出血すると寒気を感じるはずが、脇腹から全身に広がるようになる熱気に苛まれていました。そんな私の様子にいち早く気が付いて駆け寄ってくれたのはモニカさんでした。

「ヴェティスさん、大丈夫ですか!? 土門さん大変です、ヴェティスさんが!!」

モニカさんの声に、土門さんだけでなく、ラルゴくんや張さんも慌てて駆け寄ってきてくれました。私は皆さんの存在を感じながら、意識を失ってしまったのです――



わたしたちが、ヴェティスさんをスプリガン氏族から助けたところまではよかったのだけど、そのヴェティスさんは影から伸びた手によって脇腹を刺されてしまったの。

でも、短剣自体はそれほど大きなものではなく、急所を正確に刺されなければ致命傷にはならな

いと思っていたわ。

だけど、血を流すヴェティスさんが大量の汗を掻き、ブルブルと震えながらその場に倒れてしまったことに気付いて、わたしは慌てて駆け寄った。そして彼女を抱き起こそうとしたら、体は燃えるように熱くなっていたわ。

急いで土門さんと呼ぶと、彼もヴェティスさんの尋常ではない様子に慌てて駆け寄り、

「どうしたモニカ? ヴェティス、しっかりせぬかヴェティス!」

と、声をかけたんだけど、もうこのときには彼女の意識はなかったの。

「これは……」

張さんが何かに気付いたのか、そう呟いたわ。すると土門さんが、

「張! 何か分かったのか!」

と、張さんの両肩を掴み、凄く勢いで問い質したの。

「……土門さん、これはまずいことになった。ヴェティスは毒に侵されている」

「毒だ!? ……あの短剣に毒が仕込まれていたのか、クソっ! おい! 誰か毒消しを持っていないか? 持っていたら早くヴェティスに飲ませるのだ!」

「土門さん、毒消しなんて今は持っていないぜ。今回の依頼には毒消しは必要ないって、翼竜街ギルドに預けてきてしまったじゃないか!」

ラルゴの言葉に、土門さんはギリギリと奥歯を噛み締め、苦い顔になったの。

「土門さん、かなりの強行軍になるが、ヴェティスを抱えて翼竜街に戻り、ギルドで治療してもら

うしかない。交代でヴェティスを運んで……」

「それじゃ間に合わない！」

わたしは張さんに待ったをかけた。この場所からなら、翼竜街に向かうよりも……

「ここからだ、ダークエルフ氏族の豊樹の郷に向かった方が早い。ヴェティスさんを運ぶなら、豊樹の郷に向かうべきなの！ それに、豊樹の郷なら森で取れる薬草も多いし、ヴェティスさんを苦しめる毒に対抗できる毒消しを用意してくれる！」

わたしが訴えるように声を上げると、土門さんは大きく頷いてヴェティスさんを抱え上げた。

「モニカ、豊樹の郷への案内頼むぞ！ それもできるだけ早くだ!!」

わたしも大きく頷き、一目散に豊樹の郷への道を駆け出したわ。

第一章 甲竜街で厄介事が起きそうですが何か！

「へー、翼竜街の街門を初めて見たときはその堅牢さに驚いたけど、この街の門はまた趣の違う立派な門だなあ……」

俺——津田驍廣と仲間たちは、響鎚の郷を追われるように出立し、途中、リヒャルト率いる豊

樹の郷のダークエルフ氏族たちとは別れ、この旅の目的地である甲竜街へとやって来た。そして今、街門の前で立ち止まり、目の前にそそり立つ門を見上げている。

「そうだねえ。なんか豪奢っていうか、絢爛っていうか……」

紫慧も俺に同意する。

「そうでしょうね。翼竜街は、天竜賜国を人間の侵攻から護る砦としての役目も担っていますから、街門も役目に合わせて堅牢な造りになっていますの。対して、ここ甲竜街は天竜賜国の一大生産拠点、『職人の街』として、その気概を三す意味もあつて絢爛豪華な街門を構えていますの。ただ、わたくしとしては少し華美に過ぎる気もいたしますが……」

麗華の説明を聞きながら、俺は目の前の街門を改めて見上げる。

街門は、表一面に浮き彫り細工が施されていた。題材は天竜賜国に伝わる伝承らしく、竜人族を

はじめとした様々な種族が外套を纏った骸骨のような怪物と戦っている様子が描かれていた。

その見事な浮き彫りに、感嘆の声が出てしまう。

そんな俺と紫慧の様子を見て、麗華はニコニコと微笑み、満足そうにしながら、引き続き事細かに甲竜街の街門について説明してくれる。俺たちはそれを聞きつつ、甲竜街に入る者たちの列に並んで、自分の番が来るのを待っていた。

しばらくして、ようやく俺たちの順番が回ってきた。

前にいた商隊らしき幌馬車に続き、街に入るための手続きをしている守衛の前に進み出る。

街門の守衛は、甲竜人族の衛兵が務めているようで、翼竜街の防具屋でも目にした重厚な歩人甲らしき甲冑を纏っていた。ただ、俺の知る地球の歩人甲とは、若干の違いが見て取れた。

俺の知る歩人甲は、小さい鉄で作られた札を、革紐と鉄の鋳造した中華式ラメラアーマーだ。防衛力を追求するあまりに、兜から太腿まで覆うべく大量の鉄札を使用したために、重量が三十キロに達するものまで現れた。おかげで、時の権力者から二十九キロまでに重量を抑えるよう勅命が出されたという曰く付きの甲冑で、肩から二の腕を護る肩当ても存在していた。

だが、甲竜人族の衛兵が纏う歩人甲には肩当てが存在せず、代わりに甲竜人族の特徴でもある甲鱗が両の肩から張り出し、自身を護っていた。

そんな衛兵は、俺のことを一瞥し、蔑むような目つきで口元を緩める。

「次の者！　なんだ貴様、そのような馬鹿でかい騎獣を連れてこの甲竜街に入るつもり……」

どうやら、一緒にいるサビオの姿に衛兵は驚いたようだったが、次の瞬間――

「お、おい！　そこにいる二人はまさかダークエルフ氏族!?　緊急事態発生、緊急事態発生え!!」

ルークスやリスを見るなり、血相を変えて持っていた長槍を彼女たちへと向けた。

それにあわせて、俺たちの後ろに並んでいた商人などが顔色を青くして、蜘蛛の子を散らすように離れていく。代わりに、街門の近くにあった建物からは、衛兵と同じ甲冑姿の甲竜人族たちが、槍や様々な打撃武具を携え、険しい表情で飛び出してきた。きつと彼らも衛兵なのだろう。あつという間に最初の衛兵を中心にずらっと並び、戦闘陣形を形作る。

俺は訳が分からず、ポカンと事の推移を見守っていた。ただ、甲冑姿の男たちが怒ったように厳しい表情を浮かべているのを見て、また厄介事に巻き込まれたのかと、翼竜街を出てから行く先々で起こった騒動を思い出しつつ天を仰いだ。

「おいおい、今度は一体なんの騒ぎだ?」

そう愚痴を溢せば、騎獣の八脚戦馬の黒翔から降りて、俺の隣にいた麗華も首を傾げている。

「さあ?　わたくしにも何が何やらですが、あの衛兵はリスやルークスを見て慌てたよう……」
すると、リスがこの発言に苛立った。

「麗華！　その言い方は心外です。大体、わたしもルー君も、甲竜街の衛兵に武具を向けられる覚えはありません」

「そうだな。顔を見た途端、このような対応を取られる謂れはないぞ!」

ルークスも若干お怒りの様子。わずかに漏れ出すルークスの『氣』に、長槍を向けた衛兵は、それ以上動くことができなくなっているようだった。

そして、彼以外の衛兵たちは困惑している。おそらく、武器を向けられたにもかかわらず『武器を手にする』や『逃げ出す』などの自衛行動を取らず、一部を除き困惑しているだけの俺たちに、この先どうしたらいいのかわからなくなっているのだろう。

そんな状況の最中、飾り羽を付けた兜に、一際重厚そうな歩人甲を纏い、体を覆い隠すほど大きな桶を持った衛兵が、戦闘陣形を取る仲間を掻き分けて俺たちの前へと進み出た。そして、右手に持っていた錘（球状の打撃部を備えた片手用の打撃武器）を腰に戻すと、長槍を構える衛兵に下がるよう手で合図を送った。

彼は少しホッとした表情を浮かべて、ゆっくり半歩ずつ後退をはじめ、街門から街の中に一歩入った位置まで下がると、腰が抜けたように崩れ落ちた。その後、別の衛兵が肩を貸しながらさらに後方へと連れていかれた。

この様子を横目で確認した飾り羽兜は、改めて俺たちに対して誰何からやり直してきた。

「貴様らは一体何者だ！　そこにいる二人は、ダークエルフ氏族の者で間違いないか？」

少し強い口調ではあったが、冷静さが感じられる声だった。それに俺が答えようかと一歩前に踏み出そうとしたら、麗華がそっと手で制して、背負っていた五銃型突撃槍を俺に預けると、飾り羽兜の衛兵と対峙するように一歩前に出た。

「何をお疑いかは分かりませんが、ここにいる者たちは身元の確かな者ばかり。お疑いであれば翼竜街と豊樹の郷にお問い合わせていただければすぐに明らかにになります」

麗華の答えに、飾り羽兜の表情は一層険しいものに変わった。

「豊樹の郷に問い合わせろ、だと……ということは、その二人は天樹国のダークエルフ氏族で間違いないな」

街門越しにこちらを見ていた街の住人らしき甲竜人族や獣人族たちが、顔を青くして逃げるように建物の中へと隠れた。また、俺たちの前で陣形を組んでいる衛兵たちにも、異常な緊張感が漂いはじめた。その様子に、義憤にかられた麗華が口を開く。

「何なのですか？　まさか甲竜街まで、穢呪の病に侵された豊樹の郷の者は街に入ることを禁じるというのですか!?　もしそうだとしたら、なんと狭量なことでしょう。恥を知るべきですわ!!」

問いかけなのかそれとも喧嘩を売っているのかわからない麗華の言葉に、飾り羽兜は息を呑み、しばし目を閉じ眉間に皺を寄せ、熟考。そして――

「ふゝむ、しばし待たれよ。まず、誤解を解いておきたいのだが、豊樹の郷が穢呪の病に侵されたという報告は、甲竜街には届いていない。そもそも、甲竜街と豊樹の郷はあまり直接的な交流をしていないので、そういった報が届かなくとも不思議なことではない。だが、一つの郷が穢呪の病に侵されたとなれば、調べないわけにはいかぬ事案ではある。しかし、今この場でどうこうという話ではないし、それが理由で街門を護る守衛が槍を向けたわけではない。理由は他にあるのだ。そのことを貴殿らは知らないようだな。さて、困ったことになった。これはどうするべきか……」

本当に困っているような顔をしている。それを見た麗華も、怒りから困惑へと表情を変えた。

「一体どうということなのですか？　甲竜街とダークエルフ氏族の間に何があるのでしょうか？　わたくしたちが知らないことがあるというのなら、お教え願いたいのですが」

麗華の問いかけに、飾り羽兎はもうすっかり警戒心を解いて、破顔した。

「ああ、これは失礼をいたした。ここまでの騒動になっているというのに、こちらばかりで話を纏めようとしたところで無駄であったな。街門を護る我ら甲竜街衛兵団が、そこにおられるダークエルフ氏族のお二方の出現に取り乱したのには訳があるのだ。実は数日前、天樹国からの使者を名乗るハイエルフ氏族の男が領主様の邸宅を訪れ、これまでの甲竜街と天樹国の関係からは考えられないような無理難題を突きつけたのだ。しかも、要求が受け入れられない場合には『戦』も辞さぬと言いつつ。おまけに、領主様の邸宅を辞した後、まっすぐ帰ればいいものを、その要求を、街中で声高に吹聴して回ったのだ。おかげで甲竜街は一時騒然となり、今日になってようやく落ち着きを取り戻しはじめたところだな。そんな中、今度は『天樹国の防人』として名高いダークエルフ氏族が街門に姿を現したために、我々が色めき立ってしまったというわけなのだ。そこで、改めて問うが、貴殿らは一体何者なのだ？ 何用あって甲竜街を訪れたのだ」

これを聞いて、他の仲間たちと同様に麗華も緊張感を和らげると、拱手をして問いに答えた。

「では改めてお答えいたしますわ。わたくしは翼竜街領主、耀安劉が娘、耀緋麗華と申します。甲竜街領主、壤擁掩様の御舍弟、壤擁慧様と甲竜街の鍛冶師、ダッハート・ヴェヒター殿からの招聘を受けて、翼竜街から参上いたしました。お疑いならば、これをお持ちいただき、擁慧様とダッハート様にご確認いただきたく思います」

続けて、腰に差していた護身用の短剣を鞘ごと抜き、一歩前に進み出た後、懐から出した一枚の布を敷いた上に置くと、元の位置に下がった。

飾り羽兎はゆっくり地面に置かれた短剣を、敷かれた布と一緒に拾い上げた。そして、麗華に目配せをしつつ短剣をわずかに抜いて何かを確認すると、途端に驚いた表情を浮かべ、即座に後方に控える衛兵に、

「擁慧様とダッハート殿をお呼びするのだ！ 急げえ！」

と、声を張り上げた。命じられた衛兵は一瞬怪訝な顔をしつつも、すぐに街の中へと消えていった。

それから半刻。

甲竜街への入場待ちの人々から見世物のように見られつつも、飾り羽兎と彼の背後にいる衛兵たちは、そのままの姿勢と緊張感で仲間の帰りを待っていた。

俺や紫慧は、彼らと睨めっこしたところで面白いことはない、と早々に街門から離れて、サビオの腹の陰で楽な姿勢で休みを取る。

だが、麗華とレアン二人は、いまだ衛兵たちと対峙を続けていた。麗華は戻ってこない衛兵に向けてか、ブツブツと文句を言っており、レアンは彼女を宥めようと四苦八苦していた。

そんな二人のやり取りに苦笑していると、街門からまっすぐに伸びる街路を土埃を上げて駆けてくる人影が見えた。そのことを、レアンを困らせている麗華に告げようとしたとき――

「麗華殿おー！ 麗華殿はいずれにおられますかあー!?」

麗華を呼ぶ大きな声に再び視線を向けると、その声は土埃を上げ、衛兵を従えて駆けてくる人物からのものだった。

名を呼ばれた麗華の顔は、声がした途端それまで浮かべていた苛立ちが消え、いつもの凜とした雰囲気とは異なる、少しだけ頬を染め、少女然としたものに変わっていた。

一方、衛兵たちは声を聞くなり、驚き、大慌てで居住まいを正し、駆けてくる男たちの方を向いて片膝をつき、拱手した。

彼らの姿に、俺や紫慧は顔を見合わせ、またも厄介なことがやって来たのかと表情を曇らせた。

だがアルディアは何事もないかのように平然と、リリスにルークスの二人は少しニヤニヤしながら、こちらへ走ってくる男たちを見ていた。

ほどなくして俺たちの前に、新たに二人の男が到着した。

一人は衛兵に比べて細身で、優しげな顔立ちに眼鏡をかけ、肩の甲羅が出る形の旗袍を纏った甲竜人族の青年。もう一人は、蔵のような頑強な肉体と、その体にピッタリの強面の髭面の、肩が露出していない旗袍を着た年嵩のドワーフ氏族だった。

息を切らして走ってきた二人は、拱手の姿勢で出迎える衛兵を一瞥しただけで、すぐに麗華のもとへとやって来た。

「も、申し訳ありません麗華殿。こちらの手違いによりご不快な思いをしたのではないのでしょうか？ 守衛の任についた者たちには麗華殿からの来訪を伝えておいたのですが、なにぶん数日前、甲竜街に由々しき報がもたらされたばかりで、彼らも通常とは異なる緊張状態に置かれておりました。衛兵は職務を全うしようとしただけで、他意はございません。麗華殿にはまことに申し訳なく思います、なにとぞ寛大な御心でお許しただきたく伏してお願ひ申し上げます」

甲竜人族の青年はそう言う、深く頭を下げながら拱手の礼を取る。すると、麗華は慌てた様子で口を開いた。

「頭をお上げください、擁慧様。なにやら深い事情がおりのご様子。守衛の任に当たりし彼らはやるべき務めを果たしただけのこと、謝罪など必要ありません。それよりも、わたくしたちの方こそ招聘要請に應えるのが遅くなってしまったこと、お詫びを申し上げなければならぬところですよ。父、耀安劉に出されました、翼竜街に滞在せし鍛冶師に対する招聘要請を受領し、ただ今甲竜街に当該鍛冶師とその助手を務める鍛冶師見習いをお連れいたしました」

それを聞いた甲竜人族の男——擁慧は、表情を和らげた。

「ああ、そう言っていただけで、胸を撫で下ろしました。急な要請にもかかわらずお応えいただき感謝の念に堪えません。それで、かの御仁はどこにおられますか？ 早く会いたいとダッハート殿も駆けつけて——」

「麗華嬢、久しいの！　じゃが、挨拶は後じゃ。驍廣殿は、津田驍廣殿はどこにおられる!!」

擁慧の言葉を遮るように前に出てきた強面髭面のドワーフ氏族——ダッハートは、まるで掴みかかるように麗華に詰め寄ってきた。

迫るダッハートから麗華を守ろうと間に入るレアンだったが、彼のあまりの勢いにもみくちゃにされてしまう。しかし、そんな中でも必死に叫んだ。

「ダッハート様、お鎮まりください。あちらのサビオハバリ様の陰におられるのが、津田驍廣さんと紫慧紗さんです……って、驍廣さん！　知らんぷりをしていないで、助けてください!!」

するとダッハートの視線が、寝そべる巨大な猪の陰で寛ぐ俺たちへと向けられたが……
 「狼人族の少年よ、今なんと云ったのじゃ？　ワシの耳が老いて遠くなったのかのお。今『サビオハバリー様』と聞こえたのじゃが……」

ダッハートは視線をサビオに向けたまま、ゆっくりした口調で投げかける。そして、それに応えたのは、レアンではなかった。

「レアンの言った通りじゃ。儂はシュバルツティーフェの森を治めておる賢猪サビオハバリーじゃが、それがどうかしたのかな？」

サビオ自身の返答に、ダッハートだけでなく、擁壁をはじめ衛兵たちまで直立不動の姿勢を取ると、一斉に拱手拝礼で頭を下げた。

その中には、サビオを騎獣呼ばわりした衛兵もいた。彼は、傍から見ていて可哀想になるほど顔を青褪めさせ、額に汗を流し震えながら拱手拝礼の姿勢を取っている。まあ、無理もないよな……

「こ、これは賢猪サビオハバリー様でございましたか、失礼いたしました。シュバルツティーフェの森の守護者であらせられる賢猪様に甲竜街にお越しいただけるとは思いもせず……」

青褪める衛兵に気付くことなく、一同を代表して拱手拝礼のまま口上を述べはじめた擁壁に対し、サビオは少し面倒臭そうに苦笑する。

「ブッホオ……、気にせずともよい。今回、儂は驍廣の連れとして甲竜街に赴いただけじゃ。氣遣いは無用に願おうかのお。儂のことよりも、目当ての者がおるというのに、その者に対しての挨拶が後回しになっておつてよいのかな？　……これ驍廣。そのように儂の陰に隠れて様子を窺つて

いるとは人が悪い。こちらに来て、堂々と名乗りを上げぬか」

紫慧たちと一緒にのんびりやり取りを眺めていた俺に、擁壁とダッハートの視線が注がれた。

不躰な視線に居心地の悪さを感じた俺は、顔を顰めつつ一歩前に出た。

「分かっているよサビオ。……お初にお目にかかります。俺が津田驍廣です。それから、俺の隣にいるのが俺とともに鎚を揮う紫慧紗。俺たちは翼竜街の領主・耀安劉殿より、甲竜街からの招聘に応じて欲しいと頼まれて——翼竜街ギルドの職員アルディア・アシュトレトと、同じく翼竜街の拵え師・曾呂利傑利の一子で俺の武具の拵えを担当してくれている曾呂利幹利を引き連れ、耀緋麗華とその従者レアン・ケルラーリウスを案内役に甲竜街に赴いた次第。他にも翼竜街ギルドで道中の安全のために派遣された魔獣討伐者の設楽優と、豊樹の郷の族長リヒャルト・アーウインの娘で翼竜街ギルドの職員でもあるリス・アーウインに、豊樹の郷・郷守役若頭を務めるルークス・フォルモートン。最後に、甲竜街に滞在中の奥方を訪ねるために同道したダンカン・モアツレと、旅程を少しでも短縮しようと背を貸してくれた賢猪サビオハバリーの、総勢十一名という大所帯で甲竜街へ到着いたしました。すみません、こんな大勢で押しかけるつもりはなかったんですが、色々ありまして……」

そう口上を口にして苦笑いをする俺の顔を、擁壁とダッハートはまじまじと見つめてきた。その視線は、どこことなく戸惑っているような気配が見え隠れしている。

「あの……何か俺の顔についてますか？」

思わずついて出た俺の一言に、二人は慌てて首を横に振ってはいたが、戸惑いが消えたわけでは

なさそうだった。

「お二人とも、驚かれたか？ 想像していた人物と随分違うのではありませんか？」

麗華からの問いかけに、バツが悪そうに困り顔をする二人。と、擁慧が口を開いた。

「麗華殿も御人が悪い。まあ顔に出てしまった我らに問題があるのでしょうか、それにしても……」
この際ですから正直に申しましょう。壤擁恬ヨウエンテンの話やダツハート殿の弟子テルミーズ・アミードが書き送ってきた手紙から想像していた人物像とは違っておりました。いや、それらから想像される津田殿は随分と荒々しい御仁でしたから、今の口上と穏やかな物腰に驚いております。申し訳ない。ご不快な思いをさせてしまったのなら謝罪いたします。ですが、こうして改めて津田殿の前にいたしますと、確かに体中から『氣』が満ち溢あふれているのが分かります」

「いやいや、擁壁殿、それだけではないぞ。この御仁、なかなか興味深い御方のようにやぞ。先程からここ街門の周りに様々な精霊たちが集まり、嬉しそうにしておるのじやよ。儂にはその精霊たちの声が聞こえてきておる。儂は、これほどまでに多くの精霊が好意を寄せる者と出会うたことがないわ。このような御仁が儂らと同じ鍛冶師じやとすると、一体どのように鍛冶の腕を揮うのか。これは腕前を見るのが今から楽しみだわい！ ガツハツハツハツハッ♪」

豪快^{はうかい}に笑うダツハートの言葉に頷^{うなづ}きな^{ながら}、笑顔を見せる擁^{よう}。そんな二人のやり取りを見て、俺は苦笑^{くせう}しつつ、甲^{こう}竜^{りゅう}街^{がい}公子^{こうし}はともかく、テルミーズには後でどう手紙に書いたのか、じっくり問^とい質^たさないと！と心に決めた。

このとき、麗華、レアン、リリス、ルークスの四人は『荒々しい御仁』という人物像は間違いで

はなく、今は猫を被っているだけだと言いたかつたらしい。しかし、笑みを浮かべながらも瞳の奥に怒りを宿す俺の剣呑な気配に気付いて口を閉ざすことを選んだという。

他方、アルデリアと幹利は、ダッハートが彼の想像のはるか上を行く鍛冶仕事を目の当たりにしたとき、どんな顔をするだろう？ と少し意地の悪いことを考えていたようだ。

「ところで、先程衛兵の方がおかしいことというか、物騒なことを言っていたのですが。なんでも天樹国から使者が来て甲竜街に無理難題の要求を突きつけ、要求が受け入れられない場合は『戦』も辞さないと言ったとか……真のことなのですか？ 甲竜街と、天樹国の中でもその中心氏族であるハイエルフ氏族の郷である輝樹の郷は、長らく蜜月と呼べるような良好な関係だとお聞きしていました。不躰な質問だと承知してはいるのですが、そのせいでこのような騒ぎとなっておりまして、できませんでしたらお教え願えませんでしょうか？」

守衛役の衛兵の緊張感も和らいできたのを感じ取った麗華が発した言葉は、擁彗とダツハートの笑顔を奪い去り、衛兵たちに再び緊張感を与えることとなった。

しかし、街門での謂れなき詰問と、衛兵らがギリスとルークスに向けた殺氣の原因がなんなのか、明らかにすることなく甲竜街に入ってしまったては、いつまた不測の事態が起きるか分からない。

翼竜街を發つてからこれまで、行く先々で厄介な出来事に見舞われてきて、麗華も騒動の発端となつた原因を知らずに済ますことができなかったのだらう。

擁_ニ拜_スは、緊張する衛兵を抑えるようにサツと手を上げてから、麗華の方へと向き直った。

「そうですね。この騒ぎの原因をお知らせせずに済ませるわけにもいきませんね。……数日前のこ

となのですが、突然、天樹国の輝樹の郷からハイエルフ氏族の族長センチリオ・ファータ様の使者を名乗る一人のハイエルフ氏族がやって来たのです——」



そのハイエルフ氏族は、名をアモリツア・ステイーゲルと言い、甲竜街と天樹国との長い交流の中で、一度も名を聞いたことがない者でした。

彼は、甲竜街領主の邸宅にやって来てハイエルフ氏族族長センチリオ・ファータ様の使者だと言うと、兄上^姉に挨拶^{あいさつ}することもなく、いきなり邸宅の奥にいる義姉^{エクラ}上様のお部屋へ案内するように告げてきたそうです。

このとき、折悪く兄上は不在で、『兄上が邸宅に戻るまで待つてくれ！』と執事はアモリツアを押し留めようとしたそうです。しかし、アモリツアの剣幕に押し切られてしまい、義姉上様のお部屋に入られてしまいました。

アモリツアが部屋に入った当初は、義姉上様の叱責^{しっせき}の聲が部屋から漏れてきたそうですが、しばらくすると声が消えました。そして、部屋の扉が乱暴に開かれ、全身から怒気を撒き散らすアモリツアが出てきたときには、奥から義姉上様のすすり泣く声が聞こえてきたそうです。

そんな事態に、従者たちも只事^{ただごと}ではないと色めきだったのですが、アモリツアは彼らに対して、『天樹国ハイエルフ氏族族長センチリオ・ファータ様のお言葉を持参した。甲竜街領主、壊擁掩

に会いたい。取り継いでいただく！』

と、言い放ったそうです。立て続けに起こる無礼極まりない出来事に、執事も憤りを感じたものの、態度に出さず、努めて冷静に対応しました。

「擁掩様はただ今甲竜街ギルドの総支配人、秦正路殿^{シンセイロ}との会談中でございます。すぐにお伺い^{うかが}して参りますので、しばしお待ちください。御使者様を控えの間にお連れしなさい」

控えていた女給に案内を頼むと、自身は兄上のもとに急いだそうです。

そして、アモリツアのことを聞いた兄上は、正路殿との会談を中断して私を伴い、急ぎ邸宅へと戻られました。

兄上と私が領主邸宅に戻ると、執事の話す無礼な振る舞いが事実であることを示すように、女給や従者たちから憤りや苛立^{いらだ}ちが噴出していました。その様子に兄上も眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せ、アモリツアが待つ控えの間へ急いだのです。

「遠路はるばるご苦勞であつた。センチリオ殿は息災か？ しかし、センチリオ殿の使いとはいえ私の断りもなく我が妻に会い、なおかつこのように我を呼びつけるとはいささか無礼が過ぎるのではないかな？ まあ、ここはセンチリオ殿の顔を立てて、これ以上貴殿の態度についてどう言うつもりはないが、で、先触れもなく突然の訪問の用向きは何かな？」

兄上にそう言われてもなお尊大な態度を崩さないアモリツアは、懷^ふから取り出した封書を恭^{うやまつ}しく頭上^{かみ}に掲^かげてから封を切り、中から一枚の書面を取り出すと、咳^{せき}払いをしたのち、

「それでは、センチリオ様からのお言葉をお伝えまする」

と前置きして、書面を読み上げたのです。

「甲竜街領主・壤擁掩及び甲竜街に住む全ての者に、我センチリオ・ファータが要求することは二つ。一つ。十五年前に甲竜街へ拉致も同然に奪われた我が妹エクラ・ファータの身柄を即刻返還し、謝罪の証として壤擁掩と壤擁誓の首を我が前に差し出すこと。一つ。今後甲竜街は天樹国から発せられる命に従い、天樹国の辺境街としてその命脈を保証するゆえ、輝樹の郷に参り、臣下の礼を取るべし。以上、二つの要求が受け入れられぬ場合は、相応の報いを受けるものと覚悟せよ」

言い終えると、手にした書面を再び封書の中に戻し、顎をしゃくするような仕草で間近に控える執事呼び寄せると、封書を手渡し、兄上のもとに持つていくよう指示したのです。

顔面蒼白の執事は震える手で封書を受取って兄上に渡すと、逃げるように兄上の傍を離れました。執事の行動は兄上の気性を知っていたからです。ただし、このときはまだ、兄上は書面の内容をよく理解しておりませんでした。

というよりも、聡明で、いつも兄上とエクラ義姉上のことを気にかけて、甲竜街にも機会がある毎に訪れていたセンチリオ様が、このような書面を送ってくるなど思いもよらなかったからです。

同席した私も我が耳を疑いましたが、書面に目を通した兄上は、それを投げ捨てると、

「センチリオ殿は何を考えておられる？ ……とても正気の沙汰とは思えぬ。この書面は本当にあの聡明なセンチリオ殿が記したものなのか!?」

と、声を荒らげ、目の前で不遜な態度を取り続けるアモリツアを睨みつけました。

私は慌てて床に投げ捨てられた書面を拾い上げて見てみると、確かにアモリツアが読み上げた

ことが記されており、しかも文末にはセンチリオ様の署名がなされていたのです。

私にもとても信じられない内容でした。

確かにここ数年は、甲竜街と天樹国の間で、これまでの友好関係が嘘のようにギクシヤクしたり取りが増えました。交易も滞り、甲竜街ギルドでも街中で問題行動を起こした妖精族の魔獣討伐者や冒険者などへの対応に苦慮しています。

ですが、そのことを知ったセンチリオ様は大層お心を痛められ、つい先季（先月）、天樹国内の綱紀粛正と甲竜街との関係改善をお約束されたばかり。

センチリオ様と兄上は、実弟である私よりも親しい仲で、センチリオ様が甲竜街にお越しの際には、エクラ義姉上を交え、いつも三人で談笑されていました。

そもそも、兄上とエクラ義姉上との婚儀は、センチリオ様をはじめ天樹国側から『ぜひに！』と勧められたもの。それを、拉致同然に奪われたなど、濡れ衣もいところ。とてもセンチリオ様がこのような書面を送られるとは考えられなかったのです。

だからでしょう、兄上が語気を荒らげてアモリツアを問い質す気持ちはよく分かります。

ですが、アモリツアはそんな兄上に見下すような態度を取り続けました。

「その書簡は、直接センチリオ様からお預かりしたものです。お疑いであれば、誰か信を置ける者を天樹国に送ればいいでしょう。では、わたくしはこれにて失礼いたします。くれぐれも、分別を弁えたお返事がもたらされることを希望しておりますよ。甲竜街のためにね。ふっ……」

そしてそう言い捨てると、あまりのことに狼狽している我々を鼻で笑い、制止の声を上げる兄上

の声を無視して、領主邸から去ってしまったのです……



あまりの内容に、俺たちは呆れかえり、言葉を発することができなくなっていた。だが、擁壁の話は終わっていないかった。

「私と兄上は事の真偽を天樹国に……センチリオ様に確認するまでは公にはできないと考え、臧口令を敷きました。兄上も、甲竜街衛兵団第一分団の副長に部隊を付け、急ぎ天樹国へ派遣する手はずを整えていたのです。しかし、そんな我々の動きを嘲笑うかのように、アモリッツアが街中で街にいる妖精族にセンチリオ様のお言葉を伝えると称して、書簡の中身を喧伝してしまいました。しかも、まるで妖精族の者たちを煽るように、『栄えある妖精族の諸君。これまでの屈辱を晴らすときが来た。愚かなる甲竜街の領主はその分を弁えず、センチリオ様のお書きになられた書面を偽書と疑い、詰問状を送ろうとしている。これまで、我ら妖精族に辛酸を嘗めさせてきた甲竜街領主が、自らの言動所業を顧みず、さらにセンチリオ様の御心を踏みにじろうとしている。天樹国に籍を置きし我らが同朋よ！ 今こそ天樹のもとに集い、ともに怒りの烽火を上げようぞ!!』と檄を飛ばして。実際、甲竜街を訪れていた多くの妖精族は彼の言に従い、天樹国へと向かいました。もちろん、長年甲竜街に居を構えていた妖精族までついていくことはなかったのですが、公にされてしまった書簡の内容に街民は激怒し、妖精族を見る目が厳しくなっていて……」

沈痛な面持ちを浮かべて言葉を濁す擁壁。

隣に控えていたダッハートが表情を暗くし、話を引き継いだ。

「とまあそのような状況で、妖精族の中でも天樹国の防人として名高いダークエルフ氏族が、それも二人も姿を現したとなれば、街門を護る衛兵が血相を変えるのも仕方あるまい。時期が悪かったと思って許してもらえると助かる。怒るならば騒動を引き起こした天樹国からの使者にして欲しいところじゃな。それはさておき、先程の紹介の中に、響鎚の郷にその人ありと謳われたダンカン・モアツレ殿の名があったようじゃが、儂の聞き間違いかな？」

やはり年の功か、ダッハートは、麗華の苛立ちの矛先を甲竜街からアモリッツアへ変えさせ、話題も変えた。その彼の声に反応して、サビオの背中中で横になっていたダンカンが体を起こす。

「ダッハート殿、このようなところから申し訳ない。儂がダンカン・モアツレじゃ。以前は響鎚の郷の鍛冶総取締役をしてきたが、今は郷を捨てた、しがない老鍛冶師じゃ。縁あって驍廣殿と知り合い、ここまで同道させていただいた。それで、妻のエレナより甲竜街から依頼された鑑定の仕事に手間取り、帰郷が遅くなるという手紙が届いたのじゃが、何かご存じありませんかのお？」

回復してきているとはいえ、いまだ万全とは言いがたい体調のダンカンではあったが、声を掛けられた機を捉え、甲竜街を訪れた一番の目的を口にした。

ダッハートは、一瞬険しい表情を浮かべたもののすぐに元に戻し、親しい友人に会ったときのように相好を崩すと、ダンカンに大きく両手を上げた。

「おお、そちらにおられたのか！ ダンカン殿の名を耳にしたのに姿が見えなかったので、どこに

おられるのかと思っておったのだ。それに、こちらの方こそ謝罪を申し上げなければ。随分と長い間エレナ殿を甲竜街に留め置き、申し訳ない。エレナ殿は儂の工房に滞在しておられ、今も甲竜街ギルドの方で精力的に仕事をしていただいておる。実はエレナ殿も、十日ほど前から響錠の郷に文を出しても返信がなく、ダンカン殿に何かあったのではと心配しておられたのだ。お願いしていた鑑定も今日か明日には目処が付き、終わりに次第急ぎ帰ると話しておられたところだったのだ。今日、ダンカン殿から訪れてくださり、本当によかった。数日遅ければ行き違いになるところじゃったわい。擁慧様、積もる話もあると思うが、まずはエレナ殿が仕事をされておられる甲竜街ギルドに向かい、ダンカン殿と引き合わせてはいかがであらうか？」

ダッハートの提案に、擁慧は即座に頷く。

「そうですね、それがいいと思います。では驍廣殿や他の方々はいかがなさいますか？ 長旅でお疲れのことと思います。こちらで用意した宿でお休みいただき、後で改めて甲竜街に呼び出した理由をお話したいと思うのですが……」

擁慧はそう言ってくれたが、俺は首を横に振った。

「お気遣い感謝いたします。ですが、皆それほど疲れているわけでもありませんし、旅の仲間の目的が一つ達せられる様子を見逃すというのも残念ですから、もしよければ俺たちも甲竜街ギルドに同道させていただきます」

俺の申し出に、擁慧は嫌な顔一つせず、むしろ満足気に大きく頷いた。

「そうですね。そう言われるのではないかと思っておりました。もちろん、否はありません。では

ともにギルドに参りましょう。ご案内いたします」

そう言うとき擁慧は俺たちの先頭に立ち、皆を先導するように街門を潜った――

「ほお、これまた立派な街並みだ」

「そうだね、翼竜街は街の中央を貫く天竜通りはあったものの、そこから伸びる支道は結構入り組んでいて、迷路みたいにゴチャゴチャした感じだったもんね。それに比べて甲竜街は整然と並んでいて綺麗だね」

甲竜街のギルドに向かう途中、街並みを見た俺と紫慧は溜息交じりに声を上げた。

甲竜街は、街門を抜け一歩足を踏み入れると、足元には石畳の路が碁盤の目のように東西南北に走り、その路の両側には石造りの家々が建ち並んでいた。

ちなみに、翼竜街の街並みは土壁と木で作られ、豊樹の郷は通りの両脇に花壇のようなものがあり木造の家が立ち並んでいた。響錠の郷も石造りではあったが、甲竜街はそちらよりも建物の配置が整然としていて、他の郷や街とは趣の違う風情を漂わせていた。

そこへ麗華が、少し拗ねたような声を上げた。

「それは仕方のないことですわ。翼竜街は、人間の国からの侵攻に備えて作られた砦としての機能を兼ね備えているのですから。シュバルツィーフェの森を抜けて侵攻してきた人間の軍勢に、容易に突破されないように形成されているのです。中央の天竜通りさえ閉ざしてしまえば、複雑に入り組んだ支道によって町全体が迷路と化し、侵入者を惑わすことができるのですよ」

それを受けて、擁慧が補足する。

「麗華殿の仰る通りです。翼竜街と甲竜街では全く違う考えをもとに街が作られています。翼竜街が砦なら、甲竜街は街で生産された武器や防具をはじめとする製品を、効率よく天竜賜国内に流通させるために、誰もが道に迷わないように整えられているのです。しかも、生産されたものを運ぶ荷車などが行き交いやすいように道幅を広くし、石畳を敷き詰めているのですから、余計違いを感じるのだと思いますよ」

俺は、そんな二人の様子にピンと来た。

「なるほどなあ。それぞれ街の目的によって街並みが変わるのか。しかし、麗華の説明にさっと補足を入れる擁慧殿の姿がなんとも堂にいつているというか……阿吽の呼吸とでもいうのか。もしかして擁慧殿と麗華は、リリスとルークスのようによく知った仲だったり……？」

少し『下衆の勘繰り』ってやつをしてみると、途端に麗華は頬を赤く染めた。

「な、なにを言い出すのですか！ わたくしと擁慧様は、同じ天竜賜国の街を預かる領主の子女という立場上、会う機会が多いだけですわ。その……確かに知り合いではありますが、特に親しいというわけでは……」

しどろもどろで必死に誤魔化そうと言葉を連ねるものの、表情と態度からは少なくとも麗華が好意を持っていることは一目瞭然。しかも、リリスが意地悪そうに笑いながら追い打ちをかける。

「なに言ってるの。同じ領主の子女ってだけでなく、小さい頃からの幼馴染だし、麗華にとつて擁慧様は憧れのお兄様だったでしょ。まあ、仕方ないわね。今は天竜賜国の竜都・竜賜にお出での

麗華の二人のお兄様は、ともに非常に活発な悪戯小僧だったし、擁慧様もそれに輪を掛けた傍若無人な人だったでしょ。そんな中、擁慧様だけは物静かで、いつも書物を読んでいて思慮深く、子供の頃に私たちが遊びに行っても優しく接してくれていたから、麗華がほの字になるのも当然と言えば当然かもしれないわね。いつだったか、豊樹の郷でルー君と三人で遊んでいたときに『どうしたら擁慧お兄様ともっと仲よくなれるのでしょうか？』なんて訊ねてきたじゃない。それに擁慧様だって翼竜街を訪れた際に、私が麗華と仲が良いことをどこかで耳にされたのね。わざわざ翼竜街ギルドに訪ねていらして『麗華殿はどのような男子に好意をもたれるのだろうか？ 麗華殿に喜んでいただくにはどうしたらよいのだろうか？』とお訊ねになつて。両者の心の内を知って、私は随分やきもきしたもののよ。でも、麗華が魔獣討伐者を始めるにあたって、ギルド職員として何度も意思の確認をする私に力強く語ったことは、よく覚えているわよ。『わたくしは擁慧お兄様のように皆を諭し導く力はありませんが、幼い頃から鍛えてきた武の力で、お兄様をお守りすることはできるかもしれません。ただ、今のわたくしでは経験が足りない。少しでもお兄様の御力になれるよう、魔獣討伐者として翼竜街の民を護るとともに、腕を磨きたいのです！』ってね♪」

トンデモナイ暴露発言が炸裂し、麗華の顔は溶ける寸前まで熱の入った鉄のように真っ赤になっていた。しかも、リリスの発言を聞いて顔色を変えたのは、麗華だけではない。擁慧も麗華と同じように顔を真っ赤に染めていた。ただし、恥ずかしそうに顔を伏せる麗華と違い、擁慧は堂々と顔を上げて嬉しそうに照れて笑っていた。

「なるほど！ ようやく納得したわい。次男とはいえ甲竜街の公子であるのに浮いた話が一つもな

く、妻を娶つてもいい年となるのにそういった話を持ちかけられても一向に首を縦に振らなかったのは、そのような理由があつたのじゃな。しかし理由が分かつてよかつた。ワシらの中では、擁慧様は女性に興味がないのではという噂まで出はじめていたのじゃからな。ガハッハッハッハハ」豪快に笑いホクホク顔のダツハートに対し、擁慧は苦虫を嚙み潰したような渋い顔に変わった。「ダツハート殿、くれぐれもこの件は内密にお願いいたします。実は……麗華殿とは時期が来たら竜賜におられる父上に相談をしようと話していたのですが、なかなかその機が訪れず、男として情けない限り。とはいえ、このことが下手に兄上の耳に入りますと、厄介なことになりかねません。なにしろ、兄上は麗華殿のお父上である安劉様に対して並々ならぬ対抗心をお持ちですから……」「分かつておる、分かつておる。なに、擁掩殿もいつも陰に日向に支えてくれておる弟君の幸せを願わぬはずはない。ただあのご気性じゃから、妙なところからこの話を耳にすると、どうされるか分からん。それに、裏であることないこと吹聴する輩が出るとも限らん。擁慧殿が気にかけておられることはこの朴念仁でも理解しておるよ。安心なされよ、今の話は聞かなかつたことにしておくわい。じゃが、めでたい話じゃ！ 実はこのワシも擁慧殿のことを案じておつたのじゃが、幼き頃の想いを大事にし、人知れず育んでおつたとは、まことに良い話を聞いたぞ。がっはっはっはっは」厳つい顔を綻ばせて笑い続けるダツハートに、さらに顔を赤くする麗華と渋い顔を崩して笑い出す擁慧だつた。

俺たちは擁慧と麗華を冷やかしながら、街門から東西に抜ける大通りを歩いていく。

この大通りはどうやら商店街らしい。この街で生産されたと思われる様々な産物を売る店や、人々の胃袋を満たす食堂、それに街を訪れた商人たちを呼び込む宿などが建ち並んでいる。まさに、竜賜国の生産拠点として表の顔となる区画だつた。

そんな賑やかな街路を通り抜けてさらに進んでいくと、徐々に建物の趣が変わつてきた――
「……うん？　なんだかこれまでとは違う音が聞こえてきたな」

ルークスの声に導かれるように俺たちの耳に聞こえてきたのは、カンカンと金属を叩く鈍音や、パタンパタンという機織りなどの、働く音だつた。

「そう言われてみれば、なんだか段々と騒がしい、活気のある場所になつてきたな」

「ああ。微かにだが、あちらこちらから鈍の音や物を削る音が聞こえてくる」

「そうですニャ。やつぱり僕はこんな風に『物』が生み出される『音』が聞こえてくる場所に来ると、気持ちが悪くなりますニャ」

俺だけでなく、アルディアや幹利も嬉しそうにしている。

すると、先頭を歩いていたダツハートが俺たちの方へと笑顔を向けた。

「さすがはダークエルフ氏族の若頭を務める御仁じゃ。良い耳をしておられる。もう少しで、甲竜街の心臓部とも言えるべき職人街がある区画に入る。そこでは、開放された窓や扉の奥から、甲竜街の者たちの働く姿が見えることじやろう」

そう言いどこか誇らしげな表情をして、そのまま歩を進めた。

そして、ここからは『職人街』であると伝えるように立つ街灯を通り抜けた瞬間、それまで微か

にしか聞こえていなかった鈍音などの作業音がいきなり大きくなった。

あまりの大きさで、耳の良いリスやルークスはとっさに両手で耳を塞いでしまうほどで、喧騒のような作業音に慣れていない麗華やレアンも驚いた顔をしていた。一方、俺や幹利、ダンカンの三人は、目を輝かせて少し興奮する。そんな俺たちの様子を見て、紫慧とアルディアと擁護の三人は苦笑していた。

甲竜街の『職人街』は、木を切り削る音に金属を打つ音、機を織る音など様々な音に溢れている。しかも、働く職人たちが作業音に負けじと声を張り上げてやり取りしている。何も知らずに迷い込んだ者には、喧嘩でもしているのか？ 暴動でも起こっているのか？ と勘違いをさせるほど騒然としていた。ある意味ではそれほどまで活気に溢れていると言える場所だった。

そんな区画の最も奥に、一目で他とは違うと分かる三階建ての石造りの大きな建物があった。その開け放たれた扉の奥から、男性と女性の言い争う一際大きな声が、俺たちの耳に飛び込んできた。それにいち早く反応したのはダンカンで、

「うん？ この声はエレナか、一体どうして怒鳴り合っておるのじゃ？」

と、少し呆れ顔で呟く。そこへアルディアが追随する。

「エ、エレナ母さんったら、興奮して……でも一体誰と言いつ争いになっているの？ 恥ずかしい……」少し顔を赤くするといった、これまで見たことのないアルディアの表情に、翼竜街からの仲間たちは『貴重なものが見られた！』と、少し驚きつつも感動していた。そんな二人の言葉から、大きな建物の中で大声を上げている一人が、エレナ・モアツレだということが分かった。

一方、俺たちとは違って、肩を落としてゲンナリしているのはダッハートだった。

「またか……全くあの者たちは何を考えているのやら……」

彼は溜息を吐くと、すぐに自らを鼓舞するように深呼吸をした後、足に力を入れて一歩また一歩と地面を踏みしめつつ、問題の建物へ歩を進めた。

「だ、か、らあ！ 何度言ったら分かるのかねえ、この石頭の甲竜人は。そもそも、こんなに加減な精錬をしたミスリル鋼にいくら大量の精霊石を加えたって、望むような効果を得ることなんて無理だって、なんで分かんないのかねえ。しかも『鍛造』ならまだしも、『鑄造』でなんて……あたしや呆れてものが言えないよ」

「またそのようなことを！ 今、鑑定をしていただいたの道具や防具は、遠方より来られた鑄造武防具職人から直接お教えを請い、入手した鑄造法を用いて作られているのだ。その鑄造武防具職人は、我らが見ている前で、生み出した長剣で魔獣の灰狼をまるで薄い紙を切るように容易く斬り裂き、さらには断末魔の叫びとともに吐き出した炎までも斬り伏せてみせたのだ！ 今まで鍛造武具を至上と決めていたが、鑄造でも方法次第で十分に良いものが生み出せるのだと感心させられた。しかも、鑄造法を用いれば鍛造法よりも短い時間で、より多くの武具や防具を生み出せる。今、甲竜街衛兵団では、これまで使っていた旧式の筒袖鎧から、最新の防具である歩人甲へ切り替えを急いでいる。この時期に優れた鑄造法が甲竜街にもたらされたのはまさに天の助け。教えられた鑄造法を用いて製作した武具や防具が間違いないものだ」と確証を得るために、エレナ殿に鑑定して

いただいているのだ。それなのに、武器の良し悪しについて言及せずに、鑄造に用いる金属鋼のことはかりを問題視するとは、一体何を考えておられるのだ!!」

「あゝもう何度言ったらわかるんだろうねえ! いいかい? どんな鑄造法だろうと、その大本となる金属鋼が、ともに精錬されていない不純物の多いものだったら、端から駄目なんだよ。わざわざ帰郷する途中に呼びつけといて、いい加減人の話をちゃんと聞きなっ!!」

開け放たれた扉の奥で、唾を飛ばして怒鳴り合う壮年の甲竜人族とドワーフ氏族の女性に、建物内にいる者たちはオロオロするばかりで、二人を止められずにいた。

そんな『修羅場』と言って差しつかえない状況に、俺たちは目を丸くし、ダンカンは額に手をやって嘆息、擁護は『処置なし』とばかりに肩を落として力なく首を左右に振る。

そして、俺たちを案内した当のダッハートはというと、目の前で行われている狂騒にワナワナと小刻みに体を震わせ――

「いい加減にせぬかこの大馬鹿者が!!」

言い争いを続ける二人に一際大きな声が襲いかかった。その怒声は周囲の空気を震わせ、開け放たれている扉から入って建物全体を揺らし、職人街中に響き渡ると、それまで鳴り響いていた職人たちの作業音までも沈黙させ、一瞬の静寂をもたらした。だが、ほどなくして『いつものことか』とでもいうかのように再び熱意のこもった作業音が奏でられ、喧騒と活気に溢れる職人街へと戻った。

俺たちがダッハートに案内された建物は、甲竜街のギルドだった。翼竜街では街門からそれほど

離れていない、天竜通りからすぐの支道脇に設置されていた。しかし甲竜街では天竜賜国の一大生産拠点という成り立ちから、実際に生産活動を行う職人たちが集まる職人街にあった。

職人街では、武器や防具から、食器類や家具などの木工製品や、各街の衣服へと姿を変える織物まで、天竜賜国で使われている多くのものが生み出されていた。それらは全て、甲竜街ギルドに報告・記録される。ゆえに、産物の品質管理も、甲竜街ギルドの重要な仕事となっているという。

ダッハートはそのギルドで、一職人というだけでなく、長年この街で武器を鍛え、また多くの弟子を育ててきたことから、鍛冶についての相談役という立場にも就いていた。

そんな彼である。持ち込まれた相談事や未熟な鍛冶師の仕事に対して銅鑼声を張り上げるのはよくあることで、職人街の住人にとっては日常茶飯事だった。しかも、つい最近甲竜街ギルドの支配人に新しく秦正路が就いてからは、支配人として未熟な彼に対する叱咤激励であるダッハートの銅鑼声は、もはやギルドの『名物』となっていた。

もちろん正路にとって、それは歓迎すべきもので、甲竜人族とドワーフ氏族と種族は違えど、親子とは言わないまでも、至極円満な関係を築き上げていたそうだ。

――とはいえ、職人街の人たちにとっては『日常』かもしれないが、初めてダッハートの銅鑼声という甲竜街ギルドの洗礼を浴びた俺たちにとっては、非常に堪えがたきものだったわけ……

「うっ……耳が……」

ルークスとリリスは呻き声を上げながら、両耳を手で覆って蹲る。俺は二人ほど辛くはないが、強烈な轟音の一撃にキーンと耳鳴りがしていた。

「……くうう。これは、とんでもない銅鑼声だったなあ、耳鳴りがなかなかおさまらないぞ。耳の良いダークエルフ氏族の二人には、この爆音は辛かっただろう」

「驍廣や！ 別にリリスとルークスだけが特に辛いわけではないぞ。僕にとってもこれは堪らぬわ。危うく目を回してお主の頭の上から転げ落ちるところじゃったわい」

そうボヤキ、頭を左右に振るフウ。彼の言葉で視線を動かし、アルディアの足元で腹這いになり、前脚を使って自分の両耳を押さえて悶絶している牙流武の姿に目を奪われていると――

「炎、どうしちゃったの？ しっかりして。大変だよ、驍廣。炎が……炎がああ!!」

紫慧が悲鳴のまじった声を上げた。慌てて声のする方を見れば、力なくグッタリした炎を両手で抱きかかえた紫慧が、顔を青くしてオロオロしている。俺も、紫慧の呼びかけに応じず目を閉じている炎の姿に焦りを感じ、駆け寄った。しかし、何をどうしていいか分からず、紫慧と一緒にオロオロしてしまう。すると、頭上にいるフウがなぜか感心していた。

「なんじゃ？ 炎のやつは。確かにトンデモナイ声ではあったが、目を回して気を失うとは精進が足らんのお。紫慧、大丈夫じゃ！ 突然の大きな銅鑼声に目を回しただけじゃ。しばらくすれば目を覚ますじやろう、心配せんでもよいわ。しかし、ドワーフ氏族の怒声は皆大きいものじゃが、ダッハートとやらの声は一段と迫力があるのお。響鎚の郷でもこれほどの銅鑼声を上げられる者はそうはおらんのだぞ。ある意味大したもんじゃわい!!」

悠長なことを言うフウに、紫慧は非難の視線をぶつけたが、すぐに気を失っている炎が少しでも早く目覚めるようにとその体を撫ではじめた。

他の仲間たちも痛む耳を庇いながら、炎やリリス、ルークスを心配していたが、この惨状を引き起こした当の本人は、それに気付いていなかった。彼はそのまま口論をしていた二人に近付くと、岩石のような握り拳を振り上げ、やはり銅鑼声を浴びて動きを止めていた彼らに振り下ろした。

そんなダッハートに対して、擁護は冷たい視線を向けていた。

「……ダッハート殿……」

彼はポツリと呟いただけなのだが、聞いた瞬間、俺の背中に緊張が走った。しかし、ダッハートはそれにも気付くことなく、二人に説教を始めていた。

「まったくお主らは……ワシが顔を出す度に怒鳴り合いをしておつて。いい加減折り合いをつけることができるのか？ 子供の喧嘩でもあるまいし、互いに協力しあったらどうなのじゃ！ まったく……驍廣殿、お見苦しいところに案内してしまい申し訳……いかがなされた？」

説教を終えて振り向いたダッハートの目に飛び込んできたのは、自身が放った銅鑼声に苦しむ者たちの姿と、非難の視線だった。そして――

「『いかがなされた？』ではありませんよ、ダッハート殿。いつも言っているではありませんか。あなたの『声』は尋常ではないのだと……起こしてしまったことは仕方ありませんが、後で少しお話があります。良いですね」

凍りつくような笑みを浮かべる擁護に、ダッハートは誰が見ても気の毒になるほど萎縮し、顔色

を真っ青にしながら一言、

「はっ、はひ……」

と、返事をするのがやっとだった……

壊擁壁——いつも優しく温厚で柔和な笑みを浮かべている好人物として知られている。しかし、一度怒らせると、完膚なきまでに相手を論破し、精神的に追い詰め、最後には相手が泣いて許しを請うため、後に『冷笑の審問官』とも『天下のご意見番』とも呼ばれることになる傑物である。

張り扇を振るう紫慧やアルディリアとともに、俺の暴走を止められる希有な人物として後世に語り継がれることになるのだが、まだこのときにはそんな関係になるなどとは夢にも思わなかった。ただ、俺の背中に流れる冷や汗は、そういった未来を予見していたのかもしれない……閑話休題。

「エレナ殿、それから正路支配人。このところいつも、ギルド内にお二人の声が響いていると聞いていますよ。お互いそれぞれの見地から譲れないことがあるのだとは思いますが、ほどほどにお願いします。後でそのことについてはお話をお聞きますが……今日は、大切なお客様をお連れしました。特にエレナ殿にとっては、会いたいと願っていた御仁もおいでですよ」

擁壁は冷笑から、いつもの日向で寝ている猫のような柔らかな笑顔に戻ると、これまた穏やかな口調で、俺たちをギルドの中へと招き入れた。

ギルドに足を踏み入れた俺たちは、建物の広さに驚いた。

翼竜街ギルドでは、入ってすぐのところ、待合室のような空間があり、その奥にそれぞれの案件に対応するための窓口が並んでいた。

甲竜街ギルドの方は扉を抜けて中に入ると、翼竜街の何倍もある空間が広がっている。そこでは先程のエレナと正路のように、そこかしこで商談やら、職人たちの技術交流やらが賑やかに行われていた。ただ、通常の家屋の数階分もありそうな非常に高い吹き抜けのおかげで、喧噪は上にあがっていくため、論議が白熱しても、お互いの言葉が聞き取りづらくなることはなさそうだった。

そんな広々とした空間に、俺たちは物珍しそうに周りをキョロキョロと見回しながら入る。続いて病み上がりのダンカンと彼に手を貸しながら扉を潜ったアルディリアに、エレナが気付いた。

「あんた！ 一体どうしたんだい!? アリア、あんたまでここに来るなんて何があったんだい!!」

まだ足元の覚束ないダンカンに、血相を変えて駆け寄るエレナ。

そんな彼女に、アルディリアは抑え気味の口調で答えた。

「落ち着いてエレナ母さん。ワタシは翼竜街ギルドの職員として、業務で甲竜街を訪れただけだから。でも、ダンカン父さんは、響鎚の郷で謂れない疑いをかけられて、鍛冶総取締役の任を解かれ、しかもやってもいないことを自白するよう拷問を受けていたの。それでも罪を否定し続けたダンカン父さんに業を煮やしたヨゼフ族長が、無理やり断罪しようとしていたときに、ワタシたちが居合わせて——」

響鎚の郷での顛末を聞いたエレナはもちろん、ダッハートや擁壁それに正路支配人までもが、ダンカンに対する非道に義憤を抱き、怒りの表情を浮かべた。

「まったく、あの大馬鹿者は何を考えてんだい！……しかし、厄介だねえ。住み慣れた地を離れることになるってわけか。まあ、あたしは鑑定人として依頼があればどこへでも出向いていたんで、郷愁の念ってやつはそれほど強くないんだけど……。うちの人は、郷に鍛冶場を構えていたから、喪失感のアタシなんかの比じゃないだろうね。これからどうしたもんかねえ」

思案しはじめたエレナを見た正路支配人は、これは場所を移した方がいいと考えたようだ。ギルドの一室に卓と椅子、お茶などを職員に用意させると、俺たちにそこへ移動するよう促した。

正路支配人の厚意に感謝しつつ、俺たちは部屋を移り、一息つく。そうしたところで、リリスとルークスの二人が、エレナとダンカンの前に進み出た。

「エレナ殿、響鎚の郷を離れたこの後のことなのですが……」

二人がいきなり目の前に来たことに、エレナは怪訝な顔をした。そこへ、隣に座るダンカンが、卓の上で強く握りしめられている彼女の手の上に優しく自らの掌を重ねる。愛する夫の突然の行動に少し驚きつつも頬を染めるエレナに、彼は大きく頷いた。これでエレナは落ち着いたようだ。

「実は、お二人がよろしければ、豊樹の郷へいらしていただけないでしょうか？」

突然のリリスの提案に、またも疑いの目を向けるエレナ。すると、今度はルークスが口を開いた。「こら、リリス！ いきなりそう言つても、俺たちが何者なのか告げてからでなければ、信憑性も何もないだろう。失礼をいたしました、エレナ・モアツレ殿。俺は豊樹の郷の郷守衆若頭を務めるルークス・フォルモートンと申します。そして――」

「すみませんでした。私は今は翼竜街でギルド職員として働いていますが、父が豊樹の郷の族長を

務めるリリス・アーウィンと申します。もちろん、私の申し出は豊樹の郷の族長リヒャルト・アーウィンの命によるものです」

エレナはさらに困惑の表情を深くし、顔見知りである俺やアルディリアに『本当なのか？』という視線を向けてきた。そこで、俺は笑顔を返し、アルディリアも大きく頷いた。

「もちろん、お二人のご意思を尊重させていただいた上でのお話なのでご安心ください。今後、豊樹の郷は天樹国の方針とは一線を画し、朋友である翼竜街をはじめとした天樹国以外の街や国との共生の道を模索していきます。ですが、今まで武器や防具の調達を響鎚の郷に頼り切っていた豊樹の郷が天樹国との間に一線を引くとなると、それらの供給が甚だ心もとない状態となってしまいます。朋友である翼竜街でも、自身の街で必要とされる品を揃えるのに手一杯で、我々の分まで用意することは厳しいのが現状です。豊樹の郷としては、自己の安全保障の観点から、我々のために武器や防具を鍛えてくださる鍛冶師をお招きしたいと切に願っているのです。いかがでしょうか、エレナ殿。ダンカン殿とともに豊樹の郷にお越し願えませんか？」

リリスは言い終えると、ルークスとともに深々と頭を下げた。その姿にエレナは気圧されたのか目を白黒させていたが、いつまでも頭を上げようとしない二人に困り、ダンカンに助けを求めた。

「あ、あんた、どうしよう……。そうだ！ あんたはどう考えてるんだい？ 一緒に甲竜街に来たってことは、この話を前に聞いているんだろ。あんたはどう思ってるんだい？」

普段は肝っ玉母さん然としているエレナでも、いきなり別の氏族が住む郷への移住を提案されると、心穏やかでいられなかったようだ。しかし、ダンカンは落ち着いた様子で答える。

「うむ。儂はリヒャルト殿をはじめ豊樹の郷の方々の招きを受けても良いと思うておる。老いたりとはいえ、儂もまだまだ現役の鍛冶師。そんな儂の腕を買ってくれる者がおる限りは要望に^{こた}え、儂の武具を使いたいと思うてくれる者の力になりたい。そして、その者が大切にしているモノを外敵から^{まも}護れる武具を作りたい。それこそが武具鍛冶師の本懐ではないかのお。それに、向こうから郷に招きたいと言ってくれておるのじゃ、鍛冶師として職人^{みょうり}冥利に尽きるといふものじゃよ」

ダンカンもジツと見つめていたエレナは、しばしの時を置き……いつもの肝^{きも}つ玉母さんの顔でにこりと笑った。

「そうかい。あんたがそう言うならアタシに異存はないよ。アタシは、あんたについて行くだけさね♪ アタシが響鎚の郷一番の鍛冶師と認め嫁^{とこ}いだダンカン・モアツレのいるところが、アタシの居場所なんだからね」

エレナが少し恥^はずかしそうに頬を染めると、ダンカンも満更でもないのか、照れ臭そうにしながら不器用な笑みを浮かべた。

「そうですか！ その言葉を聞いて安堵^{あんど}いたしました。ダンカン・エレナ夫妻の豊樹の郷来訪を郷の者一同、諸手^{もろて}を挙げて歓迎いたします。それでは早速豊樹の郷へ向かう準備を——」

豊樹の郷行きを了承する夫妻の言葉にルークスは、気が変わらない内にとでもいうように話を進めようとした。しかし、それはさすがに勇み足というもので……

「お待ち！ 確かに亭主となら、豊樹の郷だろうがどこだろうが行くことに否^{いな}はないよ。だけど、今すぐにといふのならアタシは『はい、分かりました』なんて返事できないねえ」

否定の言葉にルークスは次の言葉を呑み込み、神妙な面持ちで見つめた。当のエレナは『困ったもんだ』とでもいうような表情を浮かべた。

「そんなに心配そうな顔をするんじゃないよ。さっきも言ったけど『今すぐ』には行けないと言っただけだよ。まだ甲竜街での仕事が終わっていないんだからね。これでも『武具鑑定士^{バツフエグレストマイスター}取締』を拝命していたエレナ・モアツレだよ。一度受けた仕事を放り出すなんて真似^{まね}はできないってことだよ。それに、うちの亭主は今、甲竜街に着いたばかりなんだ。しかも、まだ体調が万全^{まんぜん}ってわけでもなさそうじゃないか。そんな亭主を連れて長旅ができるかなんて、ちよつと考えたら分かるだろ？ 満足に歩けない亭主を一体どうやってここまで連れてきたのかは知らないけど、せめて亭主の体調が戻るまでは、ここを離れるつもりはないよ。それまで大人しく待つてな。その間にこつちも今受けている仕事をきっちり終わらせるようにするからね！」

笑顔で啖^{たん}呵^かを切ったエレナに、ルークスは自分たちの都合ばかり考え、配慮が至らなかったことに羞恥^{しゆうち}で顔を赤く染めて俯^{うつむ}いた。

「申し訳ありません……エレナ殿の仰^{おん}の通りです。ダンカン殿の体調が元に戻り、エレナ殿が抱えておられる甲竜街での仕事が終わった後に豊樹の郷に同道していただければ、それで十分です。失礼をいたしました」

呟^{つぶや}くように謝罪するルークスと、同じように頭を下げるリリース。

そんな二人の背中を、元氣付けるとともに気合を入れるように、エレナはバシバシと叩^{たた}き、

「なに、しけた顔をしてるんだい！ こんなの大したことじゃないよ、顔をお上げ。若^{わか}いうちの失